新潟県内高校受験対策講座　ＢＳＮ・ＴＯＰテレビ模試　国語　解説　２枚

〔二〕文法・語彙

(一)　「輝いて」に「いる」が補助的な意味をそえているので，補助の関係であり，イが同じ。
アは修飾語と被修飾語，ウは並立，エは主語と述語の関係。

(二)　傍線部は下に「～か」などの言い方を伴って疑問を表す呼応の副詞で，アが否定的な内容を表す呼応の副詞である。イは接続詞，ウ・エは連体詞。

(三)　ア，イ，エは相手の言動に使う尊敬語，ウは自分や身内の言動に使う謙譲語。

(四)　映像を参照

(五)　傍線部の「ない」は動詞に付いていて，助動詞「ぬ」に置き換えられるので，打ち消しの助動詞。
ウが同じ品詞・用法である。アは補助形容詞，イは形容詞，エは形容詞「少ない」の一部。

〔三〕古文

(一)　おほよそ→おおよそ

(二)　歌が「数多く」出てくることについて，直前に「誠に出いで来る」のではないとあるので，――線部分(1)はその反対の内容である。「考えが浅くて」とあるので，表面的な理解から単に次々と歌が出てきたということである。

(三)　全く歌が出てこない時なので，「歌を詠よまないでおこう」という否定の内容である。

(四)　映像を参照

(五)　前問の内容から押さえる。

(六)　空欄ｂの直前の言葉に対応する表現は，古文では「此この関を越ゆれば」なので，
すぐ後の「詠みよくなる」に注目する。

【口語訳】

常に（私が歌を学んでいる）師匠がおっしゃったことは，「総じて習いはじめのうちは，意外に歌が数多く口に出てきて，あるいは心に思うがままに自然と口に出てくるような時もあるものだ。（しかしながら）これは本当に歌を作ることができたというわけではなく，考えが浅くて，通り一遍の理解から単に次々口をついて出てきただけなのだ。あてにできる出来事と思ってはならない。ある時は一日思案を重ねても，全く出てこない時もあるものだ。そんな時は，自らの才能が乏しいことを恨んで，「こうなった以上は歌を詠まないでおこう。これほどまでに出てこない（ことが残念だ）」と嘆いてしまうものである。（しかしながら）それはむしろ，歌が上達する関門なのである。ここで油断すると，結局この関門を越えることができずに，中途で，そのまま歌を詠むことを断念してしまうものである。ここに至って発心し，怠けることなくこの関門を越えると，また口がほどけて，詠むのが上手になるものである。いつも歌に心をゆだねて詠む人は，一年に二度か三度，この関門に行き当たるよ。習いはじめの連中は，この点に留意しなさい」とおっしゃった。

〔四〕　論説文

(一)　続く部分で，「創造につながるイマジネーション」は「相当な心的エネルギー」を必要とすると述べられている。

(二)　Ａの前では，イマジネーションは「子供っぽいこと」として価値をおかない人もあると述べ，後では，「子供っぽいこと」こそが創造の源泉になると逆の内容を述べているので，逆接の接続詞「しかし」が入る。

(三)　――線部分(2)は「大人をそのようにとらえる人」の考えなので，「そのように」の指す内容を，その前からとらえる。「毎日きまりきったことを繰り返すだけ」の大人は「まったくつまらない」のである。

(四)　前の段落の最後の一文で，「それを確実に有用な創造にするためには，再び意識的な活動が必要となってくる」と述べられていることに注目する。「それ」は，前文の，創造的退行で得た「あらたな発見の萌ほう芽が」を指すので，子どもの頃に戻って得たヒントは，再び大人の観点を加えることで「現実化」できるということになる。

(五)　映像を参照

(六)　Ⅱの文章では，「モデルの無いところで自分なりの生き方を探ってゆこうとし，それに対して責任を負える人」が大人であり，「自分なりの道をまさぐって苦闘する過程そのもの」が大人になることだと述べられている。また，Ⅰの文章では，最初の段落の最後で，「自分なりの生き方を探ること」が「創造」で，「人生そのものが，ひとつの創造過程である」，――線部分(2)の次の段落で，「真の大人」とは「子供っぽさを残し」，世の中の「あらゆることに疑問をもち，イマジネーションをはたらかせる」存在で，「大人になっても，自分のこころの中に住んでいる子どもを，殺さずに生かしておく」と説明されている。これらの内容をまとめよう。